

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と 発達心理学との関連：スコーピング・レビュー

針金まゆみ¹⁾ 菅原 航平²⁾

The Relationship between “Figures Expected to Be Developed
by the End of Early Childhood” and Developmental Psychology:
A Scoping Review

HARIGANE Mayumi¹⁾ SUGAHARA Kohei²⁾

【要 旨】

本研究は、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が2017年に文部科学省から提示され、2018年より幼稚園教育要領に導入された背景を踏まえ、発達心理学の視点からその研究の到達点と課題を明らかにすることを目的にスコーピング・レビューを実施した。PRISMA-ScR ガイドラインに準拠し、医学中央雑誌と CiNii を用いた文献検索及びハンドサーチを行い、最終的に18件の文献を分析した。結果、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は幼児教育の評価の視点として、また、小学校との連携・接続の視点として浸透し、保育活動や地域特性を通じた育成プロセスが議論されている一方、評価基準の統一性、家庭や地域との連携、長期的影響の検証が課題として浮き彫りになった。今後、社会情動的スキルの評価手法の開発や、地域社会との協働を重視した保育実践の研究が必要であることが示唆された。

【キーワード】

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿、10の姿、幼稚園教育要領、発達心理学、スコーピング・レビュー

1. はじめに

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が、2017年に文部科学省から提示された。2018年から、幼稚園教育要領において、評価の視点

として定められ、具体的な段階も示されるようになってきている。この姿が提示されるに至った経緯として、小学校以降の教育への円滑な接続や現代的課題への対応を目的とした教育内容の見直しが挙げられている¹⁾。他方、子どもの育ちについては、発達心理学の分野で知見が蓄

¹⁾ 別府大学短期大学部 ²⁾ 福岡県立大学人間社会学部

積されている。

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が発達心理学の観点からどのように研究されているのか、また、他の専門分野、教育学や保育学、福祉学等において研究されている内容を発達心理学の観点で捉え直すことができないかと考えた。

そこで本研究は、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」について取り上げた研究をスコoping・レビューし、これまでの研究の到達点と今後の課題を発達心理学の観点から提示することを目的とした。

2. 方法

本研究では、PRISMA Extension for Scoping Reviews (PRISMA-ScR) ガイドライン²⁾に基づき、電子データベースによる文献検索とハンドサーチを実施した。文献検索には、医学中央雑誌文献データベース及びNII 学術情報ナビゲータ (CiNii) を用いた。

表1の適格基準及び除外基準に従い、医学中央雑誌では、検索式を「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と設定して文献を検索したところ、2024年10月17日時点で7件、「幼児期の終わりまでに育ってほしい AND 姿」と設定して検索したところ、2024年10月17日時点で8件が該当した。原著論文に絞り込むと、どちらの検索式においても同様の4件が該当した。また、検索式を「10の姿」と設定して文献を検索したところ、2024年10月17日時点で2件、原著論文に絞り込むと該当する論文はなかった。

CiNiiでは、検索式を「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と設定して文献を検索したところ、2024年10月17日時点で204件が該当し、論文に絞り込むと191件が該当した。さらに、紀要論文及び学術雑誌論文に絞り込むと62件が該当した。「幼児期の終わりまでに育ってほしい 姿」と設定して文献を検索したところ、2024年10月17日時点で249件が該当し、論文に絞り込むと232件が該当した。さらに、紀要論文及び学術雑誌論文に絞り込むと81件が該当し

た。また、検索式を「10の姿」と設定して文献を検索したところ、2024年10月17日時点で151件が該当し、論文に絞り込むと126件が該当した。さらに、紀要論文及び学術雑誌論文に絞り込むと41件が該当した。

また、電子データベースによる検索で取りこぼした文献を特定するために、抽出した論文及び関連するレビュー論文の引用文献リストにおいてハンドサーチを行った。2024年10月21日時点で1編が該当した。

表1 適格基準及び除外基準

適格基準	除外基準
「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」または「10の姿」を取り上げている	「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」または「10の姿」を取り上げていない
学術論文である	会議録ではない・学会発表抄録ではない
日本語である	日本語でない

次に、文献管理ソフト Mendeley Reference Manager を用いてレコードを整理し、重複していた88レコードを除いた101件の研究がスクリーニングの対象となった。スクリーニングは、発達心理学を専門とする第一著者と第二著者とで行った。スクリーニングの過程で、二人の判断が異なる文献については、採用として次の手続きに進めた。101件について、表1の基準に従ってタイトルを精査し、63件が除外され、38件が抽出された。続けて、表1の基準に従って抄録を精査し、17件が除外され、21件が抽出された。さらに、表1の基準に従って本文を精査し、3件が除外され、18件が抽出された。抽出された18件について、本文を精読し、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を主題として扱っているか、発達心理学に関連する記述があるか、会議録や学会発表抄録ではないかを精査した。その結果、18件が抽出された(図1)。

18件について、当該論文の目的、方法(レビュー、質問紙調査、面接調査)、対象(扱われた月齢や年齢、人数)、主要な結果、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の取り上げ方を整理した。なお、本研究は個人情報を取り扱

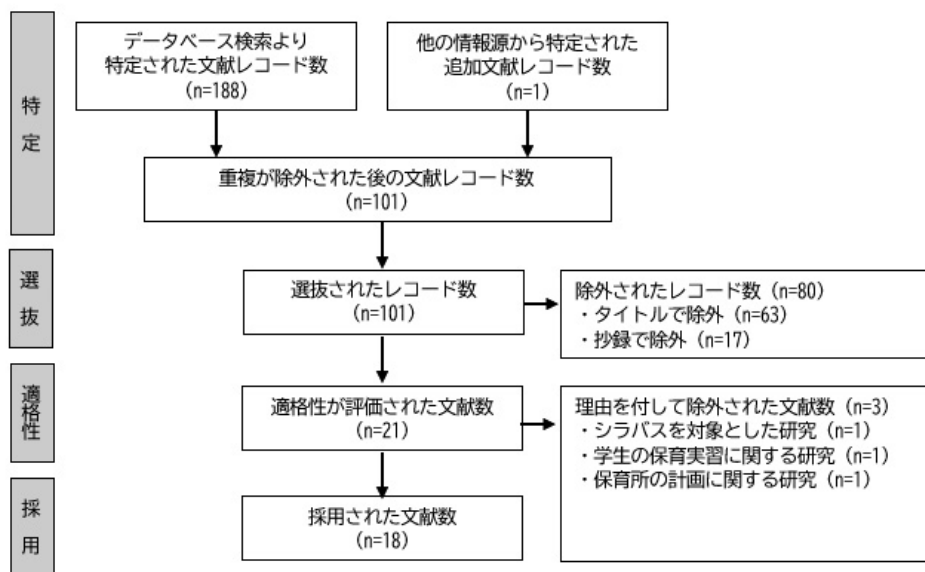


図1 論文抽出のフローチャート

わない文献レビューのため、倫理審査委員会による審査を受けていない。

3. 結果

検討対象として文献18件を抽出した(表2)。

表2 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」または「10の姿」について論じた研究

著者	年	目的	方法	対象	主要な結果	取り上げ方
小菫江 ³⁾	2018	改訂された幼稚園教育要領の「10の姿」を考察し、就学移行期の事例を通じて教育内容の連続性を検討。	事例研究、観察	首都圏の保育所・幼稚園・小学校の児童、保護者、保育者	就学移行期の課題と支援の必要性を指摘。	「10の姿」の到達点の分析と改善点を議論。
田中ら ⁴⁾	2018	改訂された「10の姿」と年間指導計画の適合性を2つの保育雑誌を用いて分析。	年間指導計画の分析(2誌比較)	保育雑誌2種、3～5歳児	雑誌ごとの「10の姿」反映の偏りを指摘し、具体性と連続性の不足を議論。	「10の姿」を年齢別に分類し、計画の改善点を提案。
賀門・奥 ⁵⁾	2019	家庭環境が「10の姿」に与える影響を調査し、家庭と園の連携の課題を分析。	質問紙調査	福島県K幼稚園の在園児と保護者(117家庭)	親子の時間の質が「10の姿」の達成に影響。地域特性も示唆。	「10の姿」を認知能力と非認知能力の観点で分類して議論。
井上 ⁶⁾	2020	絵本読み聞かせの慣行が「言葉による伝え合い」に与える影響を分析。	文献分析、慣行の検証	就学前教育の絵本読み聞かせを分析対象	自由な対話の欠如が言語力の発達を阻害する可能性を指摘。	「言葉による伝え合い」に焦点を当て、保育実践の改善点を提示。
太田 ⁷⁾	2020	幼稚園教育要領における「言葉による伝え合い」の育成方法を検討。	教育要領の歴史的分析、事例研究	就学前教育現場(具体的対象数なし)	「言葉による伝え合い」の活動全体への統合の重要性を指摘。	「言葉による伝え合い」を他の9項目との関連で議論。

著者	年	目的	方法	対象	主要な結果	取り上げ方
白石ら ⁸⁾	2020	幼稚園教育要領の「10の姿」と幼児発達の関連性を考察。	横断的な事例分析	福島大学附属幼稚園の3～5歳児	幼児の発達過程と「10の姿」の重なりを分析し、評価方法の偏りを指摘。	「10の姿」を具体的な発達過程と照らし合わせて議論。
渡邊 ⁹⁾	2020	「言葉による伝え合い」の基盤と保育者の役割を探究。	事例研究	A市立幼稚園（2018－2019年度）	「話す→聞く→伝え合い」の過程が「10の姿」達成に寄与。	「言葉による伝え合い」と保育者支援の具体例を提示。
明石 ¹⁰⁾	2021	「協同性」の発達を遊びの観察事例を通じて考察。	事例研究	幼稚園の3～5歳児を観察	子どもの「協同性」の発達が遊びを通じて顕在化する事例を分析。	「協同性」を保育者の支援や環境整備と結びつけて議論。
紀村 ¹¹⁾	2021	幼児期の運動遊びに関して、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と領域「健康」からみた検討。	アンケート調査、授業実践	小学1年生27名	身体活動を行う上でのポイント「簡単なルール」「共通の目的」「心身の変化への気づき」を提示。	幼稚園と小学校をつなぐ1つの話題として重視。
井口ら ¹²⁾	2022	小学1年担任による「10の姿」に基づいたスタートカリキュラムの評価及び修正。	アンケート調査、面接調査	小学1年担任1名	「10の姿」が小学校の学びや生活につながっており、指導上の留意点について具体的な示唆を得られることを確認。	各「10の姿」に対応する授業実践を分析。
杉本 ¹³⁾	2022	「10の姿」の9番目「言葉による伝え合い」を促す保育活動を検討。	アンケート調査	滋賀県内の保育園・幼稚園。認定こども園等保育者68名、大学生24名	日常生活における保育者と子どもとの信頼関係の重要性や遊びの充実が豊かな言葉や表現につながることを示唆。	「言葉による伝え合い」への取り組みを保育者と学生の自由記述から分析。
植草ら ¹⁴⁾	2022	自然体験活動を通じた「10の姿」の達成を目指し、保育者・学生・幼児の相互の学びを検討。	アンケート調査、観察、共起分析	保育者（10名）、学生（77名）、附属幼稚園の子どもたち	自然体験が「10の姿」の達成や保育者の視点形成に寄与することを示唆。	「協同性」「自然との関わり」を指標に自然体験を分析。
柳原ら ¹⁵⁾	2022	写真記録を活用し、「10の姿」の芽生えを明確化し、保育者間の対話を検討。	事例研究	日本女子大学附属幼稚園の3歳児	ドキュメンテーションで「10の姿」の観察が保育者間で共有化される効果を示唆。	「自立心」や「思考力の芽生え」などを具体的に分析。
井口 ¹⁶⁾	2023	「10の姿」を保育の質向上に活かすための手だてを検討。	アンケート調査	東京都内幼稚園6園・保育所4園の保育者102名	「10の姿」について、若手保育者と異なり、ベテラン保育者の活用の困難さを確認。	「10の姿」と関連付けた「評価指標」を提案。
井口ら ¹⁷⁾	2023	「10の姿」の小学校のスタートカリキュラムにおける活用方法の検証。	アンケート調査	小学1年担任2名	「10の姿」の学校生活全体における子どもの総合的な見とりに活用できる可能性を確認。	各「10の姿」に対応する子どもの見とりを分析。
差波 ¹⁸⁾	2023	幼児期終盤の姿を事例に「10の姿」を具体化し、小学校教育との接続を議論。	観察記録と事例研究	A市立幼稚園の5歳児クラス	子どもの主体的活動が「10の姿」と対応。保育者の関与が重要と確認。	「10の姿」を具体例と関連付け、小学校教育との共有を提案。
善野 ¹⁹⁾	2023	運動遊びを通じた「協同性」と「思いやり」の育成を考察。	事例研究	奈良学園大学附属幼稚園の4～5歳児	運動遊びが「10の姿」の実現に貢献する事例を提示。	「協同性」「思いやり」を具体的な活動例と結びつけて議論。
大室・高桑 ²⁰⁾	2024	豪雪地帯の雪遊びを通じて「10の姿」の発現を分析し、保育者の支援を検討。	観察記録、事例分析	山形県M市の保育園の3～5歳児（12名）	雪遊びが「健康な心と体」「道徳性・規範意識」「協同性」などの発達に寄与。	「10の姿」をマッピングし、保育者の支援との関係性を議論。

(1) 目的

4 件の文献が、幼稚園教育要領改訂に基づく「10の姿」の意義や適用可能性を分析していた^{3, 4, 8, 18)}。これらは、教育政策が保育現場や小学校教育とどのように接続されるべきかを議論することを目的としている。

別の5件の文献は、遊びや活動（例：自然体験、雪遊び、運動遊び）を通じた「10の姿」の育ちの過程を考察していた^{9, 10, 11, 19, 20)}。これらの研究は、具体的な場面における「10の姿」の発現を記録・分析し、保育者の関与の重要性を示している。

さらに別の5件の文献は、家庭環境や保育者の意識が「10の姿」の育成に与える影響を調査した^{5, 13, 14, 16, 17)}。これらは、保育者間の対話促進や教育計画の改善を目指している。

また、別の5文献は就学前教育から小学校教育への円滑な接続のための視点としての「10の姿」の活用について検討していた^{3, 11, 12, 17, 18)}。

(2) 方法

2 件の文献は、教育計画や教育要領を文献分析を通じて検討し、「10の姿」と現場での実践の適合性を評価している^{4, 7)}。この方法は、教育政策の意図と現場での具体的な実践を橋渡しする役割を果たす。

5 件の文献は、観察記録や事例研究を通じて、具体的な活動や遊びが「10の姿」の達成に与える影響を分析している^{3, 9, 10, 19, 20)}。これらの方法は、子どもの行動を直接的に記録することで、理論と実践の橋渡しを行っている。

別の5件の文献は、保育者や家庭の視点を把握するため、アンケート調査や自由記述の分析を行っていた^{5, 13, 14, 16, 17)}。これらは、保育者間の対話促進や教育計画の改善を目指している。

(3) 対象

5 件の文献が幼児を対象としており、具体的な年齢層は3歳から5歳が中心であった^{3, 9, 10, 19, 20)}。

4 件の文献は、保育者や学生を対象とし、教育現場での「10の姿」の活用を調査してい

た^{5, 12-14)}。

その他、賀門・奥⁵⁾は、家庭を中心とした調査を行い、家庭の生活環境や親子関係が「10の姿」にどのように影響を与えるかを分析していた。また、紀村¹¹⁾は、小学1年生を対象にアンケート調査及び授業実践を行い、運動遊びについて「10の姿」と領域「健康」から検討した。

(4) 主な結果

2 件の文献で、「10の姿」が幼児教育の指針として現場で活用されていることが明らかにされた^{9, 18)}。渡邊⁹⁾は「言葉による伝え合い」が保育者支援に有効であることを確認しており、差波¹⁸⁾は、小学校教育との接続における「10の姿」の有効性を示した。

2 件の文献で、自然体験や遊びを通じて、「10の姿」が発現する様子が観察された^{10, 19)}。明石¹⁰⁾は、遊びによる「協同性」の育成を確認し、善野¹⁹⁾は、運動遊びが「思いやり」の発達に寄与することを示した。

2 件の文献で、評価基準の統一性が欠如しており、改善が必要であることが示された^{8, 12)}。白石ら⁸⁾は、「10の姿」の評価方法の偏りを指摘し、井口ら¹²⁾は、保育者の経験に応じた評価の困難さを明らかにした。

賀門・奥⁵⁾は、家庭環境が「10の姿」に与える影響を示した。

3 件の文献で、「10の姿」は小学校での授業改善の視点としても有効であることを示した^{11, 12, 17)}。井口ら^{12, 17)}は、「10の姿」を視点にした見とりは、スタートカリキュラムの実践における指導上の留意点について、具体的な示唆を得られることを明らかにした。

(5) 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿 (10の姿)」の取り上げ方

渡邊⁹⁾や善野¹⁹⁾は、「10の姿」の項目を具体的に分析し、活動や行動の中でどのように育まれるかを検討していた。

賀門・奥⁵⁾は、「10の姿」に家庭環境や保護者の意識がどのように影響を及ぼすかを議論しており、教育の普及活動としての価値を示して

いた。

田中ら⁴⁾や白石ら⁸⁾は、「10の姿」が保育全体を包括する評価の視点としてどのように活用されているかを分析しており、保育計画との関連性を評価していた。

井口ら^{12,17)}や差波¹⁸⁾は、幼児教育と小学校教育の共通の視点としての価値を示していた。

4. 考察

(1) 研究方法の妥当性

本研究では、PRISMA Extension for Scoping Reviews (PRISMA-ScR) ガイドライン²⁾に基づき、文献検索、スクリーニング、精査のプロセスが体系的に行われている。この点は、スコーピング・レビューの信頼性と透明性を担保するうえで非常に妥当である。特に、適格基準と除外基準を明示し、それに基づいて複数段階で文献を精査している点は、結果の再現性を高めるための重要な要素である。

文献検索には、医学中央雑誌文献データベースとCiNiiという信頼性の高いデータベースが使用されており、対象とする分野の文献を広範にカバーしている。さらに、複数の検索式を用いていることから、検索結果の取りこぼしが最小限に抑えられていると評価できる。

また、電子データベースによる検索に加えて、ハンドサーチを併用することで、電子的に検索できない文献を補完する努力がなされている。このアプローチは、スコーピング・レビューの網羅性を高めるうえで非常に妥当である。

表1に示された適格基準及び除外基準は、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」や「10の姿」を主題とし、日本語で記述された学術論文に絞り込むという点で明確かつ適切である。特に、会議録や学会発表抄録などの資料を除外している点は、レビューの学術的価値を高めるために重要である。

文献管理ソフト (Mendeley Reference Manager) を活用し、重複レコードを排除した後、タイトルの精査、抄録の精査、本文の精査とい

う多段階プロセスを経ている点は、系統的レビューの基本要件を満たしている。この手法は、レビュー対象の文献を効率的かつ効果的に抽出するために適切である。

スクリーニングを発達心理学を専門とする複数の著者で行い、判断が異なる場合には「採用」として進める方針が取られている。このアプローチは、偏りを最小限に抑え、包括的な文献選定を行うために妥当である。また、最終的に18件を抽出し、精読を通じて主題の関連性を精査している点も信頼性を高めている。

(2) 結果

1) 研究目的の分類の妥当性

目的を「政策・教育方針の検討」「保幼小の接続」「具体的な「保育内容」または「育ち」の検討」「保育者や家庭・地域との連携」に分類した結果は、研究の多角的な視点を適切に反映しており妥当である。「政策・教育方針の検討」では、幼稚園教育要領改訂を踏まえた「10の姿」の意義と課題が議論されており^{3, 4, 8, 18)}、「保幼小の接続」では、保育現場や小学校教育との接続を検討する視点が反映されている。一方、「具体的な「保育内容」または「育ち」の検討」では保育活動を通じた具体例の提示が行われており^{9, 10, 19, 20)}、「協同性」や「言葉による伝え合い」の育成を中心に研究が進められている。「保育者や家庭・地域との連携」についても、保育者や家庭環境の影響を調査する研究^{5, 12-14)}が含まれており、各ステークホルダーを考慮した分類として適切である。

2) 研究方法の分類の妥当性

方法を「文献分析」「観察記録・事例研究」「アンケート調査」に分類した結果は、研究手法の多様性を的確に整理している。「文献分析」^{4, 7)}は政策や指導計画の背景を理論的に整理し、「観察記録・事例研究」^{9, 10, 20)}では保育現場での具体的実践を分析している。「アンケート調査」^{5, 12, 13)}は、保育者や家庭の視点を補完しており、各方法の適用範囲が明確である。

3) 対象の分類の妥当性

対象を「幼児」「保育者・教育者」「家庭・地域」に分類した結果も、幼児教育の主要な関係者を適切にカバーしており妥当である。「幼児」を対象にした研究^{10, 19, 20)}では、「10の姿」の発現を直接観察し分析している。また、「保育者・教育者」を対象にした研究^{12, 13)}は、実践と評価の視点を提供している。「家庭・地域」に関する研究⁵⁾は少ないが、この視点を扱う研究が含まれている点で分類のバランスがとれている。

4) 主要な結果の分類の妥当性

主要な結果を「教育現場での有効性」「具体的活動による発現」「授業改善の視点」「評価方法の不統一性」「家庭や地域との連携」に分類した結果は、研究の成果を包括的に整理している。「教育現場での有効性」^{9, 18)}や「具体的活動による発現」^{10, 19)}「授業改善の視点」^{11, 12, 17)}は、「10の姿」の実践的効果を示しており、「評価方法の不統一性」^{8, 12)}や「家庭や地域との連携」⁵⁾についての指摘は今後の課題として位置づけられている。

5) 「10の姿」の取り上げ方に関する分類の妥当性

「10の姿」の取り上げ方を「各項目の具体的分析」「保幼小共通言語」「家庭環境の影響」「保育全体の枠組みとしての活用」の4つに分類した点は、幼児教育現場での「10の姿」の実際の活用状況を適切に反映している。「各項目の具体的分析」^{9, 10)}は、教育要領に基づき「10の姿」を細分化して議論しており、個別指導の指針を提供する意義がある。「保幼小共通言語」^{12, 17, 18)}は、保育施設と小学校が共通理解を図る視点としての重要性を示している。「家庭への影響」⁵⁾は、教育の普及活動や保育者養成への具体的影響を示し、「10の姿」の社会的意義を明確にしている。「保育全体の枠組みとしての活用」¹⁴⁾は、指導計画全体で「10の姿」を統合的に捉える意義を論じており、保育者が「10の姿」を具体的に活用する際の方向性を提示している。この分類は、実践的価値を伴う議論を

整理するうえで妥当といえる。

(3) 先行研究の到達点

「10の姿」は幼稚園教育要領の改訂により導入された教育指針として広く認知され、政策的・実践的な基盤が整備されつつある。複数の研究が、「10の姿」の意義を政策的背景と結びつけて分析し、その到達点を評価している^{3, 4)}。これらの研究では、「10の姿」が子どもの発達を包括的に捉える枠組みとして有効であることが示され、教育現場での指導方針や年間計画の形成に大きく寄与している。このことから、「10の姿」は幼児期の教育評価の視点として一定の地位を確立したといえる。また、「10の姿」は小学校でのスタートカリキュラム作成・実施時や、子どもの発達に関する情報共有の視点となることが期待されているが、小学校側の「10の姿」に関する理解やその活用は課題となっている^{12, 17, 18)}。

研究の多くは、具体的な保育活動や地域特性に基づいて「10の姿」の発現や育ちの過程を議論しており、これが実践的に活用されつつあることを示している。例えば、自然体験活動や運動遊び、雪遊びといった具体的な活動を通じて、子どもの「協同性」や「健康な心と体」の育ちが確認されている^{10, 14, 20)}。これらの研究は、保育活動の内容が「10の姿」の育ちに直結していることを示し、現場での保育計画の具体的指針を提供している。また、保育者の援助の仕方が子どもの発達に大きく影響を及ぼすことが明らかにされており、「10の姿」を中心とした保育の質向上が進んでいることが示唆される。

一部の研究では、「10の姿」が教育者や家庭にどの程度浸透しているか、またそれが子どもの育ちにどのような影響を与えているかが議論されている⁵⁾。この研究は、教育者が「10の姿」を深く理解し、保育計画に取り入れることで、子どもの発達が促進されることを示している。一方で、家庭環境や地域特性が「10の姿」の育ちに与える影響も指摘されており、親子の時間の短縮や地域の支援体制の弱さが課題として挙げられている。これらの成果は、家庭や地域社

会との連携の重要性を示しており、「10の姿」を多面的に支えるための環境整備が必要であることを示唆している。

「10の姿」を観察・評価するための記録方法に関する議論も進展している。特に、写真記録やドキュメンテーションを活用することで、姿やその変化を捉え、保育者の気づきが深まり、子どもの成長をより正確に記録できることが示されている¹⁵⁾。また、事例研究を通じて、「10の姿」の育ちの過程を明確に描き出す手法が提案されており、これが保育者間の育ちの過程の共有を促進している。一方で、評価方法が定型化されていないことや、幼稚園教育要領などでは幼児期の終わりの姿しか例示されておらず、年長児前半以前の「10の姿」を具体的にイメージしづらい場合もあるため、現場での運用にばらつきが見られることが課題として挙げられている。

これまでの研究を総合すると、「10の姿」は幼児教育における目途として確立し、保幼小の接続期の共通の視点として認識されつつある一方で、いくつかの重要な課題が残されていることが明らかである。まず、「10の姿」が教育指針として一定の効果を発揮している一方で、その具体的な実践方法や評価基準には統一性が欠ける点が指摘されている。また、家庭や地域と連携した包括的な支援体制の構築が不十分であることが、子どもの成長に影響を及ぼしている可能性が示唆される。これらの課題に対処することで、「10の姿」がより効果的に活用され、幼児期教育や架け橋期の教育のさらなる発展が期待できる。

(4) 今後の課題：発達心理学の観点から

「10の姿」やその背景にある3つの資質・能力は、社会情動的スキル（協同性、思いやり、主体性など）の育成を重要な側面として強調している。しかし、これらのスキルがどのような環境要因や個人特性によって形成され、発達していくのかについては、十分に解明されていない部分が多い。例えば、家庭での親子関係や保育現場での人間関係がどのように社会情動的ス

キルの発達を促進または阻害するのか、長期的な観点での追跡研究が必要である。また、これらのスキルがどのように子どもの学業成績や社会的適応に寄与するかを探ることは、「10の姿」の意義をさらに深めるうえで重要である。

発達心理学の観点から見ると、幼児期は認知発達、社会性発達、情緒発達が急速に進む重要な時期である。このため、「10の姿」に示された姿が、幼児期の発達の特性や段階に適合しており、保育者や小学校教員がその姿を見とることができているかを検証することが求められる。特に、「主体的に行動する力」や「思考力の芽生え」などは、年齢や個々の発達レベルによって達成度が異なるため、それらを評価して支援する適切な保育方法や教育プログラムの開発が必要である。また、「10の姿」が幅広い子どもたち（例：発達障害や多様な文化的背景を持つ子ども）にとって適切に機能するかについての検証も重要な課題である。

「10の姿」やその背景にある3つの資質・能力の育ちの状況を評価するための基準や方法が現場で統一されていない現状が指摘されている。発達心理学の観点からは、観察評価や記録方法が子どもの成長を正確に反映し、かつ個別性を尊重するものでなければならない。例えば、標準化された観察ツールや評価指標を開発し、その心理学的妥当性（例：信頼性、妥当性）を検証する必要がある。また、評価が子どもや保育者にとって有意義なフィードバックとなるよう、評価プロセス自体の教育的意義を考慮した方法論の構築が求められる。また、これらが活用されるためには、総合性や個人内評価を重視する保育の視点を取り入れることや、保育者でも短時間で簡便に実施できることなどが求められる。発達心理学の観点とのバランスをとることが必要となる。

発達心理学では、子どもの発達を促進するエコシステムの視点が重要とされる。保育の質に関する評価の際には発達心理学の知見も取り入れられた評価尺度も活用されている。研究の中で、家庭や地域の環境が「10の姿」の達成に大きく関与していることが示唆されている⁵⁾が、

それらの具体的な連携モデルや介入プログラムは未だ十分に検討されていない。家庭・地域社会と保育現場がどのように協働して「10の姿」の背景にある3つの資質・能力を育むことができるか、具体的な方策を提案する必要がある。例えば、保護者教育プログラムの開発や地域リソースの活用を通じて、保育の枠を超えた支援体制を整備することが重要である。

日本特有の文化や価値観を反映した「10の姿」は、現代のグローバル化する社会においてどのような意味を持つのかを検討する必要がある。他国の幼児教育における目標や方法論と比較し、日本の「10の姿」がどのような独自性と普遍性を持つのかを明らかにすることは、国際的な幼児教育研究に貢献するだけでなく、国内での実践を再評価する機会となる。異文化間比較研究や国際共同研究を通じて、「10の姿」の新たな価値や改善の方向性を探ることが求められる。

「10の姿」が幼児期のみにとどまらず、児童期以降の学業、社会的適応、職業能力など、その後の人生にどのように影響を与えるかについての長期的追跡研究が不足している。発達心理学の観点から、幼児期に育まれる社会情動的スキルや社会性が成人期の生活に与える影響を明確にすることは、「10の姿」の意義をより深く理解するための重要な手がかりとなる。また、その影響を社会的に定量化し、「10の姿」に基づく教育がどの程度の社会的利益をもたらすかを検証することも重要な課題である。

5. 結論

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」や「10の姿」に関する研究は、教育の方向性としての価値や小学校との連携・接続の視点としての価値を確立してきた一方で、発達心理学の観点から多くの未解決の課題が存在する。社会情動的スキルの具体的育成プロセス、保育の総合性や個別性に配慮した評価基準の統一、家庭や地域との連携強化、グローバルな視点の導入、長期的影響の検証などが今後の重要な研究課題

である。これらの課題に取り組むことで、「10の姿」はより科学的な裏付けを伴い、幼児教育の実践に一層効果的に貢献するものと考えられる。

6. 参考文献

1. 文部科学省. 幼稚園教育要領解説. 東京: フレーベル館; 2018.
2. 友利幸之介, 澤田辰徳, 大野勘太, 高橋香代子, 沖田勇帆. スコーピングレビューのための報告ガイドライン日本語版: PRISMA-ScR. 日本臨床作業療法研究. 2020; 7: 70-76.
3. 小藺江幸子. 改訂幼稚園教育要領「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」についての考察: 就学移行期に見られる児童の人間関係の育ちを廻る事例から. 淑徳大学短期大学部研究紀要. 2018; 58: 129-142.
4. 田中敏明, 屏賀一男, 井手裕子, 高木富士男. 保育雑誌に掲載される年間指導計画の分析: 改訂された幼稚園教育要領等に示された「資質・能力」及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の視点から. 九州女子大学紀要. 2018; 55 (1): 73-86.
5. 賀門康博, 奥美代. 「幼児期の子ども達と家庭環境調査から見える変化」: “幼稚園教育要領等にある10の姿”に関わる一考察. 郡山女子大学紀要. 2019; (55): 215-232.
6. 井上剛男. 幼稚園教育要領等の改訂に伴う保育実践のあり方に関する一考察: 絵本の読み聞かせに焦点をあてて. 鈴鹿大学・鈴鹿大学短期大学部紀要. 2020; (3): 107-120.
7. 太田顕子. 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿: 『言葉による伝え合い』に関する一考察. 関西福祉科学大学紀要. 2020; 24: 39-46.
8. 白石昌子, 佐藤久美子, 星俊子, 遊佐早苗, 大和田祥加. 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」についての一考察: 3歳から5歳の発達の姿を通して. 福島大学人間発達文化学類附属学校臨床支援センター紀要. 2020; 2: 9-17.
9. 渡邊輝美. 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿: 「言葉による伝え合い」についての一考察. 初等教育 教育と実践. 2020; 44: 39-48.
10. 明石英子. 遊びを通した子ども理解に関する一考察: 領域「人間関係」と幼児期の終わりまでに育って欲しい姿. 四天王寺大学紀要. 2021; (69): 445-459.

11. 紀村修一. 幼児期の運動遊びに関する研究:「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と領域「健康」からみた検討. 広島女学院大学児童教育学科研究紀要. 2021; 8: 1-14.
12. 井口眞美, 近藤幹生, 内山隆. スタートカリキュラムにおける「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の活用の実際と課題. 実践女子大学教職センター年報. 2022; 5: 7-17
13. 杉本栄子. 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の「言葉による伝え合い」の一考察: 幼児のコミュニケーション能力を高め、自分の思いを伝える力の育ちを促す活動を探る. びわこ学院大学・びわこ学院大学短期大学部研究紀要. 2021; (13): 145-154.
14. 植草一世, 金子功一, 松原敬子, 栗原ひとみ, 金子智栄子, UEKUSA K, et al. ビオトープの自然体験を重視した新たな実習教育の構築:「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を指標にした保育科学生・保育者・幼児の相互の学びに焦点をあてて. 植草学園短期大学紀要. 2022; (23): 29-38.
15. 柳原希未, 山口舞, 日下部弘美, 請川滋大. 写真を生かした記録から見る3歳児の姿: 保育者の語り合いを通じた気づきと「10の姿」. 日本女子大学紀要 家政学部. 2022; 69: 13-21.
16. 井口眞美. 「10の姿」を保育の質向上に活かすための一考察. 保育内容研究. 2023; 1: 22-34.
17. 井口眞美, 近藤幹生, 内山隆. 「10の姿」を活用したスタートカリキュラムの評価と実践. 実践女子大学教職センター年報. 2023; 6: 7-17.
18. 差波直樹. 幼児期の終わりの子供の姿と、その育ちを共有する. 八戸学院大学短期大学部研究紀要. 2023; 57: 1-9.
19. 善野八千子. 幼小接続期における子供の育ちと学びに関する考察:「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」をてがかりに. 奈良学園大学紀要. 2023; 15: 79-95.
20. 大室亜樹, 高桑秀郎. 豪雪地域での冬期の雪遊びに見られる子どもの姿と幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿との関連性に関する一考察: 3・4・5歳児クラスの雪遊びの経験から. 羽陽学園短期大学紀要. 2024; 12(2): 45-57.